

# 極相になった社会に必要な 新芽を発芽させる決断

東京大学名誉教授  
つきおよしお  
月尾嘉男

## 森林火災は再生への出発

二〇一六年に火災によって消滅した世界の森林面積は約三〇万平方キロメートルで、イタリアの国土面積に匹敵する。これは自然破壊のようであるが、そうではない側面がある。森林の植生は時間とともに変化するが、次第に環境条件に適合した極相といわれる安定状態になる。そこでは特定の樹木が支配し、別種の植物は繁殖が困難になる。しかし火災で優勢な樹木が消滅すると、新種の樹

木に生育の機会が到来し、多様な森林が再生する。

これは森林だけではなく、地球全体の生物についても同様である。四六億年の地球の歴史において、地球の表面全体が凍結してしまうほど寒冷になった全球凍結という現象が何度か発生している。そこでは生物の八割から九割が絶滅しているが、その凍結が終了すると、生物の爆発といわれる現象により、新規の多様な自然環境が出現する。二例に共通するのは、ある環境が破壊されること



により、新規の環境が出現するといふことである。

## 両立しない工業大国と情報大国

これは自然だけではなく社会にも

現象は多々存在する。

日本の主要な経済団体の代表は依然として工業社会を牽引してきた戦前からの巨大企業出身の人々である。政府の審議委員なども同様である。これは過去の極相の森林が維持されたままということを意味し、情報社会に対応した新興企業の創出に成功した新芽である人々は依然として際物のような立場でしかない。これを打破しなければ、情報大国日本は誕生しない。

モラロジを提唱した廣池千九郎氏の理念を背景に、二〇年弱、隔月で発刊されてきた『道経塾』が今号で最終となる。残念なことではあるが、新規の媒体で再生することが決定している。これまでの社会で極相を形成してきた雑誌という媒体を廃止し、次代の社会に適合した新芽を発芽させることにした華麗な決断である。

長年、執筆させていただき、読者の皆様には愛読いただいたことに感謝し、最後の拙文とさせていただきます。



いかに時流を読み、巨大転換に適応するか。「100年先を読む」シリーズの2作目となる新刊『幸福実感社会への転進』好評発売中です。

ご注文は巻末のハガキか、オンラインショップからどうぞ。

共通する現象である。今年が明治維新一五〇年であるが、二六〇年以上の年月により極相に到達していた徳川時代という森林を一気に消滅させ、近代日本という新芽が育成する環境を提供したのが明治維新である。日本では国内の革命であるが、世界では革命は国家の興亡になり、第二次世界大戦後だけでも、二〇〇近い国家が消滅し転生し、歴史とは国家興亡の記録であることを実感させる。

技術についても、旧来の技術が支配していた社会に新興の技術が登場して環境を一変させた事例は歴史に数多く存在する。輸送の世界では、鉄道が馬車を蹴散らし、その鉄道も自動車によって衰退している。通信の世界はさらに劇的で、一〇〇年以上かけて世界に普及した電話は新興のインターネットにより、わずかに数年で少数勢力になりつつある。この勢力交代の趨勢を無理に遅延させると社会に問題が発生する。

スイスのシンクタンクが毎年発表している世界の情報競争力順位とい

う調査がある。昨年は一位がシンガポール、二位がスウェーデン、三位がアメリカ、四位がフィンランドで、日本は二七位という意外な順位である。日本は国力全体の順位でも二六位であるから対応な位置かもしれないが、残念な結果である。日本が国民の予想よりも低位にある秘密は、ドイツが一六位、韓国が一九位、中国が三一位という順位から推定できる。

アメリカのシンクタンクによる二〇一六年の工業競争力の調査結果では、一位が中国、二位がアメリカ、三位がドイツ、四位が日本、五位が韓国である。反対に情報競争力が上位のシンガポールの工業競争力は一位、スウェーデンは一三位、フィンランドは二四位である。これら二種の数字から類推できることは、アメリカを唯一の例外として、工業大国は情報大国への転換に出遅れている、もしくは困難ということである。

## 極相の打破こそ再生の要諦

この日本の転換の遅延を象徴する